

この頃は、いろんなことに
”一生懸命“になってきました。

〈聞き手〉
三井不動産株式会社
レッツ資産活用部長
藤本 稔

檀 ふみ



藤本―遡ること数十年前の私の結婚式では、大学の元クラスメイトとして司会をしていただき、本当にありがとうございました。また、先日はレッツプラザ・アライアンスメンバーの「三井の森」の仲介で今ご所有の別荘の隣地をお買い求めいただきました。誠にありがとうございます。

「三井の森」の方には非常によくしていただいたんですよ。年に数日しか過ぎさない別荘は、最小限のコストでメンテナンスするのがいいというようなことをご丁寧にご教えていただいて。いつも自分で車を運転して出かけますが、先日も紅葉にあいさつしに二泊してきましたばかりなんです。

藤本―テレビやエッセイでもご活躍ですけど、今は女優業と執筆のどちらに比重を置いているんですか？

本格女優ならぬ”本書く“女優だわなんて嘆いてますけど(笑)、執筆にはまったく比重を置いてないんです。

ただ、どう言ったらいいのかわからないのか、例えば、女優としての私にオファーの来る音楽会の司会なんかでも、この頃は台本も自分で作って、ステージで司会をするというようなこともしているから、女優業が執筆業がよくわからなくて。でも、今一番楽しくやっているのは



テーブルフラワー提供：第一園芸(株)

Profile

檀 ふみ(だん ふみ)
東京都生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。女優。主な出演ドラマにNHK『日本の面影』『春の波濤』『花の乱』『蔵』、テレビ朝日『功名が辻』、出演映画に『男はつらいよ 寅次郎純情詩集』『わが愛の譜・滝廉太郎物語』、著書に『まだふみもせず』『ありがとうございます』『父の縁側、私の書齋』『檀流きものみち』『檀ふみの茶の湯はじめ』などがある。長年の親友である阿川佐和子氏との共著『あ言えばこう食う』で第十五回講談社エッセイ賞を受賞。父は作家の檀一雄、兄はエッセイストの檀太郎。

あけすけに書いてますか？ 自分ではあまりそんなふうには思っていないんですけど。

私はもともと”立派な子ども”で、「私をいい子にさせてください」と毎日お祈りしているような子どもだったんです。そのまま高校1年生ぐらいまで立派な子だったので、それ以降いくらか崩れてもそのイメージは引きずって、何をやっても芯の方でまじめなところがあるのかなと信じています(笑)。

藤本―でもいつだったか、“まじめ”な檀さんに完全にかつがれたことがありましたよね。

ああ、千代の富士ね(笑)。「千代の富士と結婚する」っていったら、藤本さん信じちゃったんですよ。当時の私は本当にお相撲の大ファンだったし。結婚するといっても私、千代の富士と会ったこともないんだもの(笑)。なのに「まだ誰にも言っちゃだめ」とか、「九重親方がすごく反対したんだけれども、檀さんなら体格もいいし、というところで…」とか、あの時はいろいろ巧みな嘘をつけてね(笑)。でもあれ、何でバレたんだっけ？

藤本―それはだって、あの後、千代の富士が本当に結婚したから。ああ、そうか(笑)。

声の仕事。最近では、万葉集を読む『日めぐり万葉集』というテレビ番組を1年間やらせていただきました。

それにもなつて、番組の内容を紹介する月刊誌が出て、依頼されればそこにエッセイを書かざるをえないでしょ。これも、ナレーションをしているところまでは女優なんだけれども、エッセイを書くとなるとやっぱり執筆

業なのかなと…。私自身は「女優がエッセイを書いた」というふうには思っていないけど。

藤本―私を知っている女優の檀ふみさんというのは清楚なイメージがあったんだけど、あけすけにいろんな事が書かれているエッセイを読むと、ちよつとギャップを感じますね。

奮闘する者を人は愛する——そんな父の言葉を心に刻んで。

藤本—オペラやワインなど多彩な趣味をお持ちですが、お着物も集めておられるとか。

そもそも物にはあまり興味がなく、着物もほとんど持ってなかったんですが、『檀流きものみち』という本の仕事をきっかけに、10年ぐらいい前から少しずつ意識して買うようになっていきます。着物も私の職業のひとつというか、女優としての付加価値を高める物のひとつだと気づいたので。

藤本—日本文化つながりで、『檀ふみの茶の湯はじめ』という本もありますがお茶の魅力ってどんなところですか？

いろんな魅力がありますけど、何より私が感じるのは、茶室の文化のすばらしさ。本当のことを言うと、いま一番ほしいものは茶室かもしれない。

物が何もない空間に何かが入って、少し空気が動いていって、物が片付けられると、また何もない空間に戻っていく。茶室はそんな不思議な空間で、

そういうものって外国にはないんじゃないかしら。

私たちの生活空間って、いろいろな物で押しつぶされそうになっていたりから、茶室のように何もない空間に好きなものだけを持ち込んで、好きなお茶碗で一服して、好きな花がひとつあって、というような時間を持ってみたいなあと思いますね。だから自宅にも茶室を持つのが夢。

藤本—お住まいといえば、今の自宅はもうずいぶん長いですよ。

ええ。生まれたところで、子供の頃から一緒に育った木があつて、これまでいちども離れてない。もう家やままと私は同じというか、どこもかしこも思い出がつまっている感じがしますね。藤本—「自宅については『父の縁側、私の書斎』に詳しく書かれています。あれは家のことを書いたんですが、家に関わる記憶となると、すべて父につながるんですね。



作家だった父は、やはり私に何かを書いてほしかったらしいんです。だから、「書くんなら一生懸命書きなさい」「いい加減な文章を書いてはいけない」ということを遺言のように言い残しています。

一生懸命、何かをする——父の遺言はほとんどそうだったことで、「奮闘する者を人は愛する」とか、「人の100倍奮闘しなさい」というようなことを繰り返し言っていたんですね。けれど私は、「一生懸命書く、というのはいったいどういうことだろう？」という疑問にいつもぶつかってきた。どうすれば自分は奮闘したといえるのか、それがよくわからなかったんです。でもずっとそんなことを考えているうちに、この頃は結構、私なりに一生懸命書いている、執筆に限らず、いろんなことに奮闘しているなと思えるようになってきました。

何が一生懸命かという、何かをやっている時に、それに100%時間を捧げることが私にとっての一生懸命。何かをしなから、何か違うことを考えながら書くことはないし、ほかの仕事でもそれだけに集中して、その仕事が一番よくなることだけを考えるようになりましたね。

一番向いているのは、人と人との媒体となって伝えること。

藤本—女優として、あるいはエッセイストとして、そうやって心を砕いて取り組んだ仕事は、映画やドラマ、本というカタチになって、人々の心にも残っていく。ある意味、とてもうらやましいことだなあと思います。

友達が口にした、私の大好きな言葉があるんです。それは、「仕事は贅沢にしましょう」という言葉。

どういうことかという、その友達にはヘアメイクさんで、例えばカツラやヘアピースなんかをのせる時に、ちよつと長さが合わない、ジョッキジョッキ切つ

てしまうわけです。「もったいないじゃない」と言うと、「仕事は贅沢にしましょう」と言うのね。そういうところでケチをしないんです。

私はその時に「そうだ!」と思った。私たちが売っているのは、ある意味で夢だ、なのに、大事なところでケチケチすると、それを観ている人の気持ちも貧しくなってしまうかもしれない、と。

だから書く時も、「このエピソードはもったいないからまた次に使おう」なんて思わない。「これを書いたら次のネタがなくなってしまう」なんて考

えない。その時その時の一番いいものを惜しみなく使う。エッセイでも「イメージが壊れるから下剤の話はやめよう」じゃなくて(笑)、みんなが一番喜んでもらえることを書く。

たっぷり時間をかけて、それが読む人になるべく不快感を与えないように気をつけて書く。演技やナレーションでも十分に練習するとか、しっかり調べていくとか、いろいろな方法を考えるときか、そういうところは絶対にケチらないようにと心掛けていますね。

藤本—そんなお話を聞くと、お芝居にしても、エッセイにしても、人々に感動を与えられるすばらしいお仕事だと改めて思いますね。

私はこの頃、自分に一番向いていることは何かと考える時に、「伝えること」だと思ふようになったんです。例えば、すばらしい音楽がある。とてもすばらしいということは感じられるんですが、ただ、その音楽のどこがどんな風にすばしいか、というのを私自身は十分には表現しきれない。けれど、そのすばらしさをわかる人から上手に引き出すことはできると思う。だから、私は誰かと誰かのへ媒体へはなれるような気がするんです。

本当なら、何かを自分で発信できることが一番だとは思いますが、まだなかなか、そこまで積み上げてきてはいないので、もうちよつと積み上げて、いつか自分でも発信できるようにしたいなと思っています。

藤本—それは期待したいですね。本日はどうもありがとうございました。



著書『檀ふみのサイン入り著書『檀ふみの茶の湯はじめ』を5名様にプレゼント



応募は同封の「ご連絡シート」にてお申し込みください。なお、当選は発送をもって代えさせていただきます。